火３・現代教育論シケプリ

１．学校教育の病理

ａ校則強化　ｂいじめ　ｃ対教師暴力

○ａｂｃの連関　①悪循環説

ａ⇉ｂ・ｃ→ａ⇉ｂ・ｃ→‥‥

②エスカレート説

受験のストレス→ｂ→ｃ→ａ

③板挟み説

非行が校内に→ｃ→ａ→ｂ（教師の見えない所で）

○子どもをめぐる問題

１９５０年代：非行の第１のピーク

１９６０年代半ば：非行の第２のピーク

〃　後半：大学紛争

１９７０年代前半：「シラケ」→大学紛争で挫折を経験。一部先鋭化（例：連合赤軍事件）

：暴走族登場。

〃　半ば：「乱塾」→受験フィーバー。

：「落ちこぼれ」→小学校で３割、中学校で５割、高校で７割。

〃　後半：非行の第３のピーク（例：ツッパリ、番長）

１９８０年代前半：　〃　続く。

：校内暴力の明確化→臨時教育審議会が発足。

〃　半ば：いじめ問題（例：中野富士見中学校事件）

：子どもの自殺（例：タレントの後追い）

：偏差値教育→人間の序列化

〃　後半：管理過剰（例：体罰死事件）

：登校拒否←一貫して右肩上がり。

１９９０年代前半：「オカルトブーム」「オタク」（例：連続幼女殺人事件）

〃　半ば：新興宗教ブーム

：いじめ第２のピーク

〃　後半：子どもの暴力“キレる”

：小学校まで学級崩壊

２０００年代～　：学力低下／児童虐待

○学校の抱える問題

受験体制→挫折した子が家庭内暴力へ

管理体制→いじめ・体罰過剰へ（ゆるめれば学力低下）

学業不振→校内暴力・非行

校内暴力

○現象

A器物破損

１．放置（掃除をしない、タバコの吸殻）

２．破損（ﾛｯｶ ーや錠）、落書き（マジックからスプレー）

３．破壊（窓、火災報知器、消火器）

B生徒間暴力

１．校外の非行集団と接触

２．金品の強奪、強要

３．校内侵入

４．抗争（他校と盛り場等で喧嘩）

５．非行集団の結成↳自衛のため（例：横浜の浮浪者襲撃事件）

＜非行集団の手口＞

正常集団の中傷（クラスのリーダーを“ぶりっ子”などと誹謗、クラスの秩序崩壊）

↓

弱いものいじめ（暴力を見せつけて脅迫）

↓

中間層の迎合（見て見ぬふり。密告もしない。）

↓

“玉突き現象”（いじめの被害者の加害者化←さらに弱い子からの搾取）

↓

グループの脱落防止策（例：中間層へのﾄﾞﾛ ップアウト防ぐ不良顕示スタイル）

→周りがレッテルを貼るので後戻りしにくくなる。

○非行グループがクラスの５％を超えると教師の指導は不可能に。

C対教師暴力

１．教師挑発

２．規則の段階的違反（服装や髪型）

３．合理化（教師同士反応がバラバラなのをあげつらう）

４．公然化（教師の根負けを待つ）

５．授業妨害←８０年代以降顕著に！

６．衝動的な対教師暴力←今増えつつある。

７．計画的な対教師暴力（例：授業中タバコやシンナーを吸う）

○原因

１外的誘引の増加

中学の非行集団⇄地域の非行集団⇄組織暴力団　カンパと称して搾取／卒業したら吸収

外的誘引の除去①接触を断つ（例：ＰＴＡの地域巡視）

②番長集団の解体

③番長の跡目相続の阻止（例：学年の隔離←入り口を学年別に）

２内的誘引の増加

＝学校への不満　①学業不振…非行で補導された中学生のうち、学力水準下位層が７８％

→教師への恨みに。

②自己評価が低い

③将来の展望の喪失…非行は長い目で見て損、というリスク計算が出来ない。真面目に生きている人をかわいそうに思っている。

対策①'「わかる授業」②'「肯定的自己像の育成」③'「進路指導」（進学だけでなく）

３外的抑止力の低下

学校教育＋家庭の躾…学校は本来警察のような直接的な抑止力を持たない。

→非行で補導された中学生のうち、家庭環境が放任…６９％

溺愛…７％／過干渉…４％

対応①手口や対応の研究（例：教師の役割分担、マニュアル作り）

②毅然とした態度・教職員の団結　　○体罰は逆効果！

③家庭との連携（例：学級通信）

④早期発見・早期解決

４内的抑止力の低下

＝規範意識・道徳意識の低下　　自己中心性／自己顕示性

対策①「暴力否定宣言」

②生徒会活動…民主的な生徒集団を抑止力に。

③部活動の活性化

○９０年代学校は落ち着きをみせたが、２０００年代校内暴力は漸増傾向にある。

体罰・管理教育

１形式的禁止論

・学校教育法１１条で禁じられている。（但し懲戒は可）

・体罰は生徒の人権侵害である。

２形式的容認論

・愛のムチ論　例：水戸５中事件＜スキンシップ判決＞

→“スキンシップより強度の外的刺激であり体罰ではない”として教師は無罪に。

・体罰容認国もある。例：“ in loco parents ” 教師は親のかわりに体罰を加えていい。
・躾委任論…学校は親のかわりに躾として体罰を加えている。

３現場的許容論

・体罰は非行対策に有効。　授業不成立状況→規則違反→いじめ→対教師暴力
　○６２％の教師が体罰経験あり、と回答。
　○静めるために体罰を行うと、弱い教師への反抗やいじめの増加が懸念される。
　　→教師の体罰を観察学習して、成り代わって暴力をふるう。

４現場的禁止論

・体罰以外の非行、授業妨害対策を講じるべき。
　ａ倫理的要求（悪いことは悪いとわからせる）　ｂわかる授業

いじめ

１統計

補導事件　１５００人／年→全国の中学生５００万人の０．０４％
学校の認知　５万件／年→　　〃　　１％
生徒の認知　　〃　　４０％⇔親の認知　１５％
軽微ないじめ　　〃　　７５％
○小中高で…　　加害　　○いじめの一般化。

		あり	なし
被害	あり	３８％	１９％
	なし	１７％	２３％

２経過

①鞘当て段階…クラス替え直後、クラス中が悪意なく無差別にからかいあう。
②流動性の段階…からかうとムキになる子やレッテルを貼りやすい子をターゲットに
　　いやがらせ。立場の入れ替わりが頻繁に起こる。
　　→いじめられた子が別の子をいじめて自分へのいじめを逸らす。
③固定化の段階…“ 集団の力学 ”（いついじめられる側に回るかわからないのは怖いから）
　　…物を壊すなど手口が悪質化。

	被害加害者	被害者	
加害者	２０，８	１６，９	仲裁者
１９，２０	観衆	傍観	７，４
	６，１６	３３，４４	

（%）小学生，中学生

○手口の残酷化、期間の長期化
○被害者の拡大…正義感の強い子や勉強の出来る子もいじめの対象に。

○「出る杭はうたれる」集団の画一化への圧力→目立ちたくないという心理の蔓延。
④手口の陰湿化…粗暴化、性犯罪→すぐ露見するような幼稚ないじめはしない。

３原因
①外的誘引の増加＝非行集団の影響
段々リーダーに従わなくなる
弱い者いじめをして逆らわないようにする
いじめられる子がいじめる側に回る→被害加害層で自殺に走るケース多い。
②学校に対する不満
③教師の介入の遅れ…いじめの不可視性（動機不明、巧妙な正当化など）
…仲裁者が出にくい。←集団同調の圧力
④「まじめの崩壊」…勉強の社会的目標『社会や他者のために』が失われた。
○社会が豊かになり、メディアの発達と漫才ブームが起きたことで、「面白い・つまらない」という新機軸ができてしまった…？

４対策
いじめの早期発見　例：ソシオメトリックテスト（教師が人間関係を把握する。）
ﾛｰﾙﾌﾟﾚｲ（いじめをテーマにシナリオを書かせ、必ず１回はいじめられる役をする。）
異年齢集団作り（地域の中でまとまって遊び、仲裁のスキルや弱者への思いやりを学ぶ。）

不登校

１類型　　中学校で７万人・小学校で２万人
年３０日（５０日とする場合も）以上の長期欠席
→経済的理由による不就学　年５００人程
→身体的病気　年１５００人程
→「学校嫌い」○精神病によるもの
○神経症型（急性・慢性）ex．パニック障害、強迫神経症
○怠学型
＜神経症型の経過＞
①身体症状訴える／心気的な（体調が悪い）時期続く→登校時間過ぎると治る。
②一部、暴力・合理化が見られる ex．家庭内暴力・「教え方が悪い」
③内閉期（閉じこもり・怠惰）○登校刺激や登校不安から自らを守る。
○思いつめやすい。
○昼夜逆転生活に陥る。
④回復期　○生活習慣が戻り、外界に興味を持つ。

２原因

・家庭因：母親からの分離不安説

・性格因：自我独立の挫折説←親の過干渉・過保護

　　：自己像脅威説←理想の自己像を学校の競争や規則で保てなくなるから。

・学校因：アンケート「なぜ学校に行けなくなったのか」by 東京シューレ

　　○子どもどうしの関係　○学校の雰囲気（派閥）　○いじめ

　　：公式（年３０日）１％

　　不登校経験（年１～２９日）１７％

　　遅刻・早退経験　２５％

　　不登校感情　６７％

　　不登校感情なし　１／３　　○不登校はどの子にも起こりうる。

　　：アンケート「いつから不登校か」by 法務省人権擁護局

　　中学がダントツ。

＜１次原因＞学校状況（いじめ・非行・不登校）

↓

＜１次結果＞不登校

↓

＜２次原因＞家族・本人・教師に影響及ぼす。

↓

＜２次結果＞登校刺激（叱責・体罰）…かえって本人の葛藤・強迫を強めてしまう。

↓

＜３次結果＞神経症

○「不登校→家族・本人の不安」と考える人も多い。×「家族・本人の不安→不登校」

３対応

・学校状況の改善（いじめ・非行の解決）

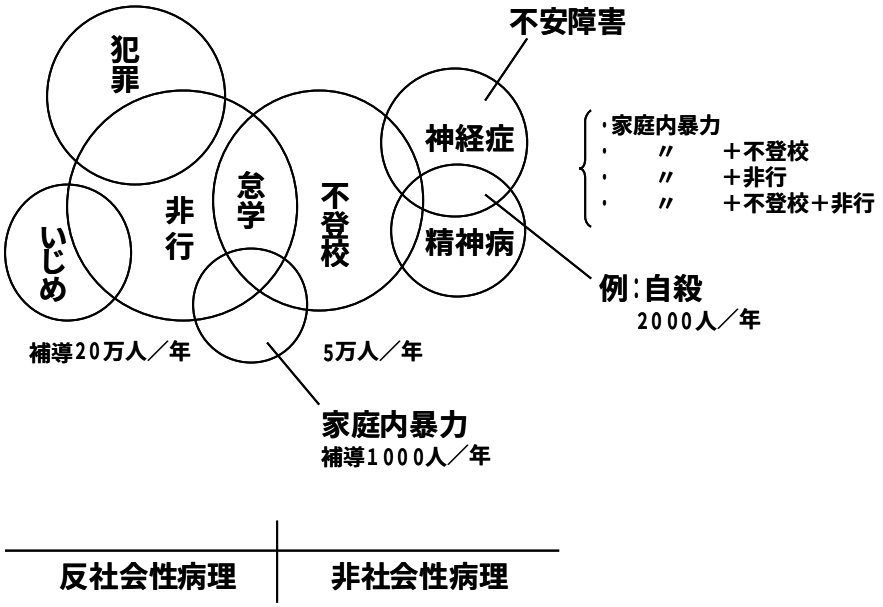
・登校刺激をやめる（行かせる指導は初期と怠学型には有効）

・カウンセリングや心理療法を受ける（親子で）

・不登校児の居場所作り（夜間中学や私塾）

不安障害

＜現代の学校の問題＞



＜精神医学上の分類＞

・外因性精神障害：脳に原因がある明確なもの　例：失語症・失認症

・内因性　〃　　：原因不明だがおそらく脳に原因があるもの　例：統合失調症

・心因性　〃　　：ストレスや性格に原因があるもの

○体験化“悩む”例：神経症　○身体化“病む”例：心身症

○行動化　例：自己破壊行動（リスカ）

：衝動行動（薬物・性非行・摂食障害）

：無気力行動＝アパシー

上に行くほど生物学的治療が、下に行くほど心理学的治療が必要になる。

１症状

ａパニック障害

理由もなく過呼吸発作や動悸が激しくなる（心臓神経症）などのパニック発作がおこる。

↓

予期発作（１度発作をおこした場所に行くのが怖い）　例：空間恐怖・外出恐怖

ｂ恐怖症　③は中高生に多い。

①物理的空間　例：高所恐怖・閉所恐怖・広場恐怖

②物体　　例：ばい菌恐怖・先端恐怖・動物恐怖

③対人場面　　例：赤面恐怖・自己視線恐怖←自分の視線が不快なのでは、と恐れる。

ｃ強迫

○ある無意味な観念や行動が、意思に反して繰り返しおこる。

例：階段の段数を数えないと気がすまない。

○抑えると不安になる。

例：ガスの元栓を締めたかどうか何度も確認する。

○生活妨害的…１つのことにかまけて他のことが手につかない。

ｄ抑うつ

憂鬱な気分・不安・無気力

ｅヒステリー

①転換症状　by フロイト

心の中の葛藤→身体症状　知覚面：視力・聴力の低下、皮膚感覚の喪失

運動面：失声・失立・失歩・ヒステリー性けいれん発作

≠詐病、神経自体の異常

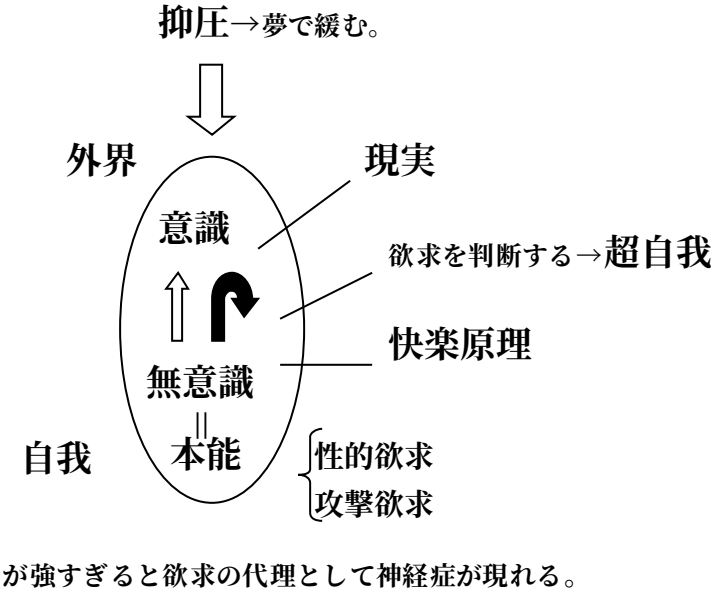
②解離症状

＝一過性の人格解体　・多重人格→記憶障害という説もある。

・解離性健忘、解離性遁走

２原因と治療

○精神分析療法



原体験・外傷体験→不安（身体部位との偶発的連合／情緒の抑圧）

↓

症状→催眠…**心理療法**（原体験の再生／情緒の抑圧）→症状の消失

後に催眠を捨て、「自由連想法」へ。

転移分析　転移感情（＝患者から治療者に向けられた強い感情）を未解決でもちこされた親子関係の分析に利用する。

○行動療法

行動理論と行動療法

＜古典的条件づけ＞　一種の「学習」

①無条件刺激→無条件反応

②無条件刺激・条件刺激→無条件反応　　例：パブロフの犬

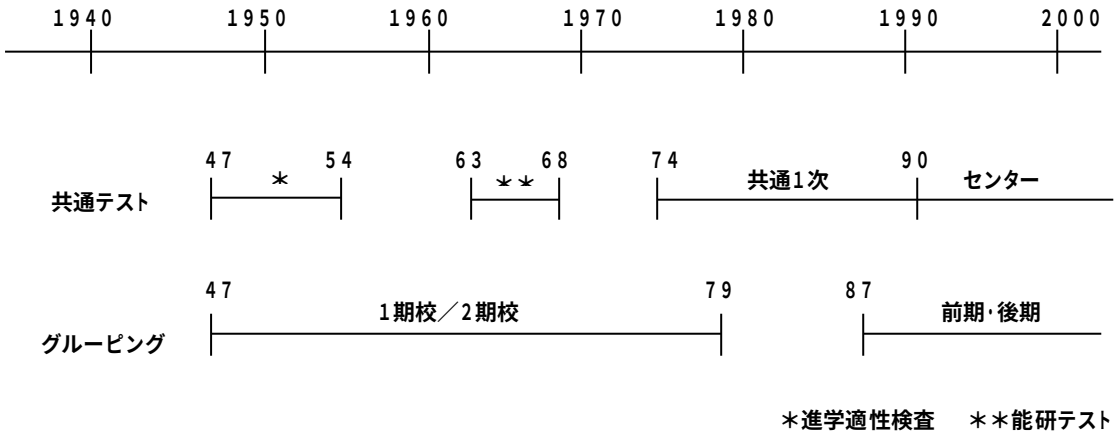
③条件刺激→条件反応

・恐怖症は学習によって治療できる。→**行動療法**

・抑うつの治療→**認知療法**

なんでも悪く考える／自己評価が低い…などの認知のゆがみを直す。

大学入試



共通１次試験　＜目的＞アメリカモデルの導入

→尺度の多元化・入試過熱の抑制（欧米諸国では国による共通試験のみ、が普通。）

↳「富士山型から八ヶ岳型へ」…東大を頂点とする序列を改め、個性のある大学に！

実際は「ヒマラヤ型」になったとも。